

魂

乃

鳥

歌集

魂

の
とら

竹内景

歌集 魂の鳥

昭和五十五年十二月三日印刷
昭和五十五年十二月十三日発行
定価三〇〇〇円

著者 竹内 榮一

上尾市緑丘二丁目七番三号

発行者 魂の鳥刊行会

上尾市緑丘三丁目七番二号竹内方
電話 〇四八セ(七三)一六〇五

代表者 坂井 忠義

米山 浩一

森 基泰

制作 秀明美術印刷

大宮市本郷町九一三
電話 〇四六(六三)二四四六

著者略歴

大正四年生。昭和八年埼玉県立浦和中学校卒業。同十三年国学院大学卒業。東京都電気通信工学校（改称東海工業学校）勤務を経て、埼玉県立浦和中学校より引続き同浦和高等学校に勤務。母校在職三十一年にして、昭和五十二年退職。

目次

I 睦月立つ

睦月立つ	制作年度 51・52	3
------	---------------	---

美緒をりをり	52・53・54・55	6
--------	-------------	---

II あかね雲

寒ふたたび	52	41
-------	----	----

あかね雲	52	46
------	----	----

二松庵秋歌	52	50
-------	----	----

冬たつ海	52	54
------	----	----

二松庵冬歌	52・53	57
-------	-------	----

寒あくるころ	53	61
--------	----	----

川名寒日	53	64
------	----	----

小園夏日	53	65
------	----	----

三山南天

冬	春	斑鳩	綿虫	山	寒	み山	山萩	歳	山	冬	山	山	山	春	綿虫	寒	葉山
晴るる	あさよひ	のころぐさ	の庭	の雨	の水	のうへ	の庭	の月	くさの花	庭	南天	南天	南天	あさよひ	の庭	ひらく	山初冬
51	55	51	55	51	51	51	50	49	48	47	47			55	55	54	53
104	73	103	72	100	96	91	89	86	83	82	77			73	72	70	67

Ⅳ 妣が家

制作年度

妣が家 41・42 107

寒の日 42 126

夏日独語 42 129

多武峯・山の辺 42 132

旅のち 42 135

寧日 42 137

柿蔭山房即事 43 139

Ⅴ 山霞む日

古墳の丘 38 143

北山抄 38 154

雪のうへ 39 159

山霞む日 39 163

杉の秀 39 167

阿騎野の雪 39 173

IV 銀杏の庭

忘	花	制作 年度
40	40	176
夜半のまぼろし	40	180
雪恋ひ	40	182
川原湯	40	183
冬立つ山翳	40	186
鳥	40	189
いてふの庭	36	193
かぶきびと	36	197
無告	36	200
遙けき声	37 ¹	201
寒の日子し	37	203
とりふね抄	16・18・19	205
あと書き		

I

むつ
た

睦月立つ

うひ孫のよき名選らむと、万葉の清きしらべの歌　浮か
べをり

男子はそれ、女子はと　口ずさむ。孫と呼ぶべきその名
求めて

冬至はや過ぎし日ざしの　窓による。娘はふくらかに、
ははとなるべく

ははとなる娘の面持ちの やつれしもせぬをよろこぶ。
妻といひつつ

全けき命生^アれよ、とただ祈る。信じられざる世を懼^{オソ}るれ
ば

睦月立つ。うまるる命 うひ孫とおもふ心の、日日をそ
ぞろに

月欠けて、寒天暗きあかときを　産へ室に充ちしか。その
うぶ声は

安らなる美緒の寝顔を　目守りゐて、寒最中なること
忘れをり

乳のめばねむる　美緒子よ。ほの丹さす　その頬にそよ
と触れて、愛しき

ちち飲みて足れば機嫌か。いとちさき舌なめずりの音
たててをり

美緒をりをり

あらざらむ わがのち

美緒に遺すうた。

をとめとなりし時待ちて、見よ

I

いとほしきものを　美緒子と名に呼びて、世の常のごと
孫に寄りなむ

育児の書送らむ。けふは雛の日よ。よきをとめごの美緒
をゆめみて

美緒のため　起き上り小法師求めたり。ひとりしてあそ
ぶ日も　はやく来よ

かくしつゝ飽かぬものかも。わが膝にゐてつたひくる
美緒のぬくもり

いまだ齒の生えぬ　ちひさき口開けて、美緒は笑ふも。
笑ひそめつも

ことばにはならぬ　ふうぶを独りごつ　美緒子よ。ちい
ちと呼ぶ日や、いつ

やうやくに　もの見えそむる黒き瞳。われを追ひしを
思ひつつ来ぬ

骨しかとすわれる項^{ウナジ}　すがやかに立てて、美緒子は　わ
が胸に受く

大きあたま　あげてはおろす、亀のごと。這ひ這ひせよ
や。いまひと息ぞ

うち笑みて声あぐるなり。ごむ・ぼうる小^チさきその手に
投げかへしつ

すこやかに 五体生ひ立つ 肉^シのしまり。美緒が享^ウけた
るひとつの幸ぞ

黒き瞳^メをふかく細めて、笑みかへす。孫よ、美緒子よ。
汝^ニに溺^シるる